
あの子はNEET使い

あきのあかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの子はNEET使い

【Nコード】

N4499BA

【作者名】

あきのあかね

【あらすじ】

高校を中退して2年の月日が経ったある日の事、中城靖也は今日も何もしないで暮らしていた。そんな時、突如やって来た自称NEET使いの謎の女に「お前は私のNEETになれ!」と言われる。

NEETは来客に弱い

NEETとは職を持たず、働く意志も無い。それらしい理由をつけて、家族を騙してでも働く事から逃げ続ける。

そのくせ、部屋に閉じこもって電気を使い、便所に行けば水を使い、空気を吸って二酸化炭素を排出し、働かない癖に口だけは一人前。このため、「働かざる者食うべからず」を美徳としている世間では人間のクズとして扱われる。

某情報サイトより抜粋。

NEET、そう。

それは、選ばれなくてもなれる勇者。

世間からは蔑むように見られ、同情され、またある時は羨望されるべく存在。

まるで物置のような、四畳半の狭い畳の部屋に俺はいた。

俺、なかしろ中城 せいや靖也はNEETであった。

……NEETであるがゆえに、孤高であった……………。

高校を中退してから2年、社会という闇と戦う元・我が同胞は今年で18歳になるらしい。

元気にしてるだろうか？

何もかもが面倒になった俺は光の速さで高校を中退し、毎日インターネットと漫画を読み漁る。

両親は呆れて何も言わず、こうして親にも見捨てられた俺は、雲を見て時間の流れを知るといふ特技を会得した。

「もう昼か……………」

そして起きる時間は決まって昼過ぎ。

「今日もお気に入りのお宝画像でも探すとするか……」
毎日のライフワーク。

俺の仕事はコレ、だから俺はNETなんかじゃない。

ピンポーン

チャイムが鳴った。

……誰も出る様子がないな。

1階で物音がしないという事は家族はいないのだろうか？

今日は何曜日だ？

「水曜日だよ」

一体何回目の水曜日かなんてのは知ったこっちゃないが、親父は出勤、母ちゃんはパート、妹は……学校じゃん。

でも気にしない、百戦錬磨の俺は居留守も使ってしまう。

蛻もめけの殻だと落胆して帰っていくがいい、悪徳セールスマン。

「ふっ……負けを知りたい……」

ネットで良く見る用語をとりあえず呟き、余韻に浸る。

ピンポーン

「何……だと？」

かなり相手も頑固だな。

そこにいと疑われない、その揺ぎ無き信念……立派だ。

「だが、屈しない！ テロには屈しないー！」

ピンポーン

「……」

ピンポピンポピンポーン

連打！？

しかも、そのチャイムは秒間16連打を記録しそうな勢いだ。

気になった俺は、恐る恐る玄関へと近づいた。

ガチャガチャ

ドアノブを捻っている。

空き巣か？

高鳴る心臓を抑えて扉の向こうの景色を覗こうとして
バキィィ

という音と共に扉ごと後ろに吹き飛ばされた。

「うわっ!？」

扉は無理矢理抉じ開けられていて、修復は無理そうだ。
その扉を壊した相手だけでも確認しなければいけない。
それが自宅警備を任される俺の宿命だった。

「お前は中城靖也だな？ 私は久遠くんと音子おとね NEET使いだ」

とんでもなく可愛い女の子が、扉をぶっ壊して、虫を見るような目
でボクを見ってきます。

「お前は私のNEETになれ!」

俺の知らない間に随分と社会は変わったなあ。

NEETは突然に弱い

.....。

よれよれのTシャツに短パン。

今年18歳になる俺は、そんな格好で正座させられてた。

この狭い四畳半の空間に。

「何なの？ その生活観まる出しの馬鹿まる出し！ もうお前は『まる出し』って呼ぶことにするぞ！」

突然の訪問者は、我が砦の門をぶち壊すだけじゃ物足りずに、あるう事か俺に説教を始めていた。

「あの……」

「黙れ、まる出し！」

よくわからないNの腕章を付けて、ポニーテールの似合う女の子が、俺をまる出したと言う。

あの後、俺は襟首を掴まれて、引きずられるように自室へと案内された。

そう、案内された……俺の部屋なのに……。

「あ、あの」

俺は事態の説明を願うべく、声を張ってこの女に質問をする事にした。

「黙れ！」

「まる出しにも話させてください！」

「よし、許す！」

許可が出た。

「いきなり家に押し入ってきて、なんで俺は正座させられてるんだよ！」

流石の俺も意味が分からなくてキレたぞ！

「ニートだからだ」
「あ、そうですね」

随分と世間の風当たりが強くなったな！ ニート！

「他に質問はないか？ ないなら早速行くぞ」

「あ、あります！ あります！ ニートの俺に質問させてください！」

「言ってみる」

とてつもなく、威圧的な視線で俺を見る奇奇怪怪な不可解至極極まらない女。

「ニート使いつて……何？」

さっき開口一番に聞いた、聞き慣れない言葉を聞いた。

ニート使い、ニートを使うというわけなのだから、ニートは働かなければならない、それに対してニートは働かない事を指す言葉の八ズだ。

何やら根本的に決定的に致命的に矛盾が発生している気がするぞ。

「中々鋭いな。まる出し」

まる出しじゃねえよ！ どこも出してねえよ！

「ニート使い、それはニートを使って仕事をする職業の事だ」

そ、それはとても生産性があつて……！

「以上だ」

非効率な話だった。

「待て待て待て、何が『ニートを使って仕事をする職業の事だ』だよ！！ 結局お前は働かねえじゃん！」

「ニートを働かすように働いている」

「結局は何もしてないだろ！」

そんな職業があるはずないだろ！

横に置いてあるパソコンに検索をかけて、慌しくマウスを操作する。

【ニート使い養成学校】

あ、あつた。
ありました。

し、しかし仮に『あつても』だ。

「なんで俺なんだよ！ 他にいるだろニートなんて！」

「配られたプリントの中に、まる出しなお前がいたんだ」

そう言つて、折りたたまれたプリントを広げて突き出すニート使い。

「顔写真しかねえだろ！どこも出してねえよ！」

と言つか。

「なんで俺の個人情報がこんなに大々的にプリントアウトされてんだよ！！！」

頼む、誰か水分をくれ、突っ込み疲れてきた。

「そういう権力を持っている」

すげえなニート使い。

「と、兎に角だ！ 俺はこの家から動かない。勝手に家に入って俺の人生を滅茶苦茶にするな！ 俺はずっと何もしないで生きていくんだあああああ！！！」

どうだ？ 自分勝手に人間のクズだろう？ 自分で言つて若干変な汗が出るくらいの駄目人間っぷりだが、さあ、帰れよ。【頭がおかしい社会不適合者なう】って呟けよ。

ところが、そんな俺の想像を常に斜め右下70度曲がって少し行った所に行くニート使い。

「お前つて奴は……！！ やっぱり私の目に狂いはなかったぞ！ ニート！」

と抱きついてきた。

あの……胸が顔に当たってます。

NEETは交渉に弱い

「ち、ちよつと待ってくれ！」

顔に当たる未知の感触をしばらく味わいたかったが、理性がすごぶる働いているようで俺は後退りして離れる。

「意味がわからん！」

俺は今持ちえる最大の言語能力を發揮して、その気持ちを伝えた。

「何も臆する事はないぞ、ニート。社会はお前が思っているより楽しいものだ」

腰に手をあて、蔑むような視線を送り続ける女は、すつと手を差し伸べ優しく微笑んだ。

「一緒に来い」

しばらく家に引き籠もっていたという事もあり、こんな風に同じ年くらいの女の子と話すのは久しぶりな気がする。

それでも、

「嫌だね、今更俺みたいなゴミが社会に出て歩いても恥を晒して生きていくだけのようなものだろ」

胡坐あぐらをかいて、女の視線から逃れるようにソッポを向く。

「ふむ……」

女は少し考える仕草を取って、続けた。

「お前は何を糧に生きて、何の為に生きているんだ？」

「…… 毎日の墮落を糧にだよ。墮落が俺を停滞させるんだ、そして、その停滞を守るために生きている。ただそれだけ、別に生きていようが死んでいようが関係ない」

親に迷惑をかけて、家族に迷惑をかけて、俺はそれでも呑気に生きているんだ。

「生きていようが死んでいようが同じ……か」

哀れむような目で、優しく見つめられる。

胸が少しキュッと締め付けられた。

「な、なんだよ」

「だったら、その有っても無くても変わらないお前という存在を私に貸してくれ」

「貸す？」

「お前がいれば、少なからず私だけは大いに助かる。単位も取れるし、信頼も得られるんだ」

「なんだよそれ。」

「自分勝手だな」

「そうだ、自分勝手だ。それゆえに、お前には絶対に来てもらおう。」

「お前は誰かの為に生きてみるべきなんだ」

「誰かの……為？」

「最後に誰かの為に何かをしようとしたのはいつだったっけ？」

「未だに目の前のノート使いは手を差し伸べている。」

「この手を取ったら俺は変わるのだろうか。」

「久しく忘れていた、人の感触を思い出した。」

「おっばい。」

「下賤、下賤これが俺の思考回路。」

「森羅万象、世界の真理、揺るがない、おっばいだけは……何があっても揺るがない。」

「そのレンタル料は勿論払う」

「少女は手を取れと言わんばかりに目の前まで差し伸べて、くいくいと指を動かす。」

「レンタル料？」

「ああ、私が愛してやろう。お前みたいなの……もろ出しを」

「顔を赤らめて言う台詞じゃねえだろ！」

「いや、赤らめるべき台詞なのかもしれないが、自分の捏造した事象で赤らめられても困る。」

何度も言うが、どこも出してないからな。
しかし、俺の理性は断固たる決意を持っている。
そんな甘い誘惑に動揺はしない。

「愛すつて……い、一体全体、な、何を言つて、るんだ、よ」

動揺するのは仕方ねえだろ、ちくしょう。

「そのままの意味だ。お前が今までニートをしてた期間に味わうべきだった青春を私が払ってやるというのだ。お前がスク水の女子を見たかったというならば、私は一晩考えてもいい」

それは素晴らしい！！

「一晩考えて断るけどな」

だったら始めから言うなよ。

でも……俺が変わる為には、こんな滅茶苦茶な展開も有りなのかも知れない。

もうこのままだと思っていた。

親の脛すねを齧かじり、齧り、齧り、齧り尽くす。

「親の脛齧り虫になる夢だつて見たんだ……」

遠い日を夢見るような、そんな虚ろの目を俺はしていたのかも知れない。

そんな俺を見て。

「気持ち悪いな……」

と、何の容赦もなくニート使いは一步下がった。

………傷付くなあ。

「………了解した」

俺のニートに対する執着心なんてこんなもんだったのか、否。

これは俺の人生への執着心なのだろうか。

「よし、交渉成立だな」

「いや、待て！ まずは一日体験だ。内容によって俺は破棄する」
手を取ったその手は柔らかく、温かかった。

「いいだろう。絶対気に入ってくれると思うぞ、あの学校は」

……学校？

「まずは入学手続きをしろ」

そう言つて、もう一枚謎の紙をニート使いはポケットから取り出して突き出す。

ちよつと……。

「ちよつと待ったあああああああああああああああ……！！」

俺は何年かぶりに学校という挫折地点へ戻ることになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4499ba/>

あの子はNEET使い

2012年1月14日23時50分発行